

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Tocolytic Treatment and Maternal Characteristics, Obstetric Outcomes, and Offspring Childhood Outcomes Among Births at and after 37 Weeks of Gestation: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

子宮収縮抑制薬投与と母体・産科的アウトカムと出生児のアウトカムの関連

ユニットセンター(UC)等名: 福島ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Archives of Gynecology and Obstetrics

2023 年: DOI: 10.1007/s00404-023-07203-5.

筆頭著者名: 村田 強志

所属 UC 名: 福島ユニットセンター

目的:

子宮収縮抑制薬とは、切迫早産(早産になりそうな状態)の治療に用いられる薬剤で、好ましくない子宮の収縮を抑えるはたらきがあります。子宮収縮抑制薬は早産を予防する可能性があります。正期産(37 週以降)に達した場合、母体や出生児の健康に影響を及ぼすかどうか、まだよく分かっておりません。本研究では、妊娠中の子宮収縮抑制薬の投与と母体や出生児の健康状態との関連を調べました。

方法:

エコチル調査に参加した妊婦及び出生児のデータから、37 週以降に分娩となった症例を対象とし、子宮収縮抑制薬の投与と、母体および出生児の健康状態の関連について統計解析を行いました。子宮収縮抑制薬として最も頻用されているリトドリン塩酸塩の使用については、さらに別の解析を行いました。母体の健康状態は年齢や BMI、妊娠高血圧症候群などの産科合併症、出生児の健康状態は 3 歳時点の神経発達の違いやアレルギー性疾患の有無を調べました。出生児の健康状態に関する解析時には、妊婦の年齢や体格、喫煙や学歴、収入といった妊婦の社会的な背景因子を考慮した解析も行いました。

結果:

63,409 人の妊婦について解析を行いました。子宮収縮抑制薬の投与を受けた群は受けなかった群に比較して、年齢が低く、BMI が小さいことが確認されました。また、出生週数が早く、出生児の出生体重も小さいという群間差がみられました。出生児の神経発達には明らかな差はありませんでしたが、子宮収縮抑制薬の投与を受けた妊婦から出生した児では、3 歳時点の食物アレルギーの調整オッズ比が 1.09、アトピー性皮膚炎が 1.08、アレルギー性鼻炎が 1.09 という結果でした。

考察(研究の限界を含める):

子宮収縮抑制薬投与の有無により、母体および出生児の健康状態にはいくつか差が生じていることが明らかとなりました。母体の健康状態については切迫早産に特有の特徴が見受けられました。一方で、出生児の健康状態については、神経発達に差がなく、アレルギー性疾患がわずかに増加する結果でした。出生児の神経発達に差がないことは子宮収縮薬使用の利点になりえますが、母体および出生児の健康状態の変化と関連がある可能性があり注意が必要です。本研究の限界点として、リトドリン塩酸塩を含む子宮収縮抑制薬の投与量や期間が不明であること、切迫早産の重症度に関する情報が不足していることなどが挙げられます。

結論:

子宮収縮抑制薬は母体および出生児の健康状態に生じ得る変化に注意を払った使用が求められます。しかしながら、本研究には限界もあるので、注意深い解釈が必要です。妊娠中の子宮収縮抑制薬の投与と 37 週以降の分娩における母体や出生児との関連についてはさらなる研究が必要です。